

## 『文化・自然・人々が共存する古都：鎌倉』

坂本 詩穂子

想像してみてください。東京駅から鎌倉行きの電車に乗っているとします…。最初しばらくの間は無機質なビルの間を通過し、そろそろ退屈してくる頃に電車は北鎌倉に近づいていきます。そしてその時には、周囲の色彩と空気が変化したことに気づかれることでしょう。それはまさに鎌倉の深い自然が醸し出す深緑の色とそして新鮮な空気なのです。

大都市からたった1時間の移動で、まったく異なる趣の世界に立ち入れるのです。鎌倉：歴史と文化を有し、そして山と海に囲まれた町。ここでは多くの名刹・古刹や歴史的な建造物を訪れることができ、また山歩きや海水浴をして余暇を楽しむこともできるのです。この町は一年を通して、季節ごとに違った表情で訪れる人々を魅了するでしょう。そして、もしこの街の日常の生活を知ることができたらよりよいのです。なぜなら、いわゆる観光地をはずれた静かな地区や小道にこそ、この町の本当の魅力があるからです。そしてそこには、史跡や自然と共存しながらゆっくりと生活を送る鎌倉の人々の生活が見えてくるでしょう。

幸いなことに、私は家族と共にこの鎌倉の地に住むという幸運を得ました。本日は鎌倉の魅力について、日常生活という視点から、そして私がここに住み始めてから得た印象を踏まえながら述べたいと思います。

私たち家族は2年前に都会にあったマンションから鎌倉に越してきました。この移住を決意した理由は、現在7歳になる私たちの息子が大きく成長する時期に自然の中で力いっぱい遊んでほしいと願ったからです。なぜなら、以前住んでいた場所は観察したくてもアリ1匹見つけられないような環境でした。今では、我が家は鎌倉の山々に囲まれた谷戸の一つのなかにあり、私たちが願ったように息子は毎日この谷を駆けまわり、あちこちで小さな虫を追いかけています。もちろん、私にとっても鎌倉に住みかを持つことはずっと憧れであったのです。

このようにして、私たちは今となっては季節ごと、時間ごとに変化する景色の色彩や表情を存分に味わっています。春には広大な山々がパステル色に染まり、山桜の淡いピンクや、そこに藤の薄紫色が混じって見えます。梅雨時には紫陽花が繊細で多彩な色で小路を飾ります。夏の緑は刻々と変化し、秋の紅葉の素晴らしさは言うまでもないでしょう。冬の寒い朝には家々から立ち上る煙突の煙が靄と入り混じって漂っています。1年を通して、鶯の歌、鳶、蝉、コオロギ、時にはフクロウの鳴き声が耳に届きます。目には見えなくても、何かしら動物の存在を感じたりもします。

この大自然に囲まれて、古い寺社や歴史的な建物が、有名なものも無名なものも、自然体で、無人為に、時には粗野なままそこここに点在しています。私はこのような情景を鎌倉の象徴のように感じるのです。つまり、この古都の町は自然と建造物とが混ざり合っただけで構築されており、それらは過度に人の手が加えられることなく自然に町中のあちこちに存在しているのです。これはもしかすると《武家文化》や《禅》の精神の影響でもあるのでしょうか。源氏の時代からのそれらの思想が、簡素さや素朴さに重きを置いていたことから私はそう感じるのです。

そしてこのような環境の中で、鎌倉の住民はそれぞれの季節に合った自然の法則にならってゆっくりと生活を営んでいます。彼らは自分たちの生活と歴史の遺産を守りながら、自然とうまく共存する術を伝統から知っているのです。こうしてはるか昔の時代から続く時の流れの中で、彼らの生活は自然と送られていくのです。

伝統といえば、ここではあちこちの地域で神事である祭典がとり行われています。これらのお祭りは、伝統を引き継ぐことに情熱を持って取り組む住民によって支えられています。私たちは、鎌倉の生活をよりよく知るためにもこうしたお祭りにできるだけ参加しようと心がけています。そして実は、地域の人たちが私たちをととても歓迎してくださることに驚きさえ感じているのです。彼らは私たちのような新入りの住民を快く受け入れ、心を開いてくれているのです。一般的には、歴史ある町の住人は閉鎖的で排他的と思われがちですが、鎌倉の住人は、少なくとも私たちが住んでいる地区では、まったくその例には当てはまらないようです。お祭りの間だけでなく、日常生活でも私たちははずいぶんとご近所や地域の方々に助けられました。彼らのおかげで、私たちは新しい環境に早くに馴染むことができた気がします。ところが以前住んでいたマンションでは、お隣の方の顔をきちんと知ることさえできなかったのです。ここでは、人と道ですれ違えば必ず挨拶を交わし、時には30分も立ち話しをすることも珍しくありません。大都市をすぐそばにししながら、鎌倉には日本の原風景がいまだに残っているのです。

こういった住民の性質ともいえるべき特徴は、鎌倉の歴史に由来するものではないかと私は考えています。この地は源氏の勝利から室町時代まで繁栄の時を迎え、その時代に多くの重要な寺社や歴史的建造物が建立されています。その後数世紀間の静寂のあと、明治時代になって別荘地として移住してくる人々によって再び栄えることとなります。彼らはこの地の歴史的な豊かさと、自然に囲まれた穏やかさを再発見したのです。こうして今日まで、私たちのように多くのこの町に魅かれる人々がよそから鎌倉に住居を求めてやってきています。

鎌倉は確かに長い歴史を持っています。ここで先祖代々の土地に住む人もいます。しかしこの地の出身でない人もいて、同じようにこの歴史を引き継ごうとしています。それでも彼らはこの地の伝統を守ることに大きな意欲を持っていることでしょう。なぜならここに住むことを自ら選んでやってきたわけですから。このように鎌倉の歴史はいろいろな境

遇の人々が混じりあって支えてきたからこそ、彼らは住民同士で意思の疎通を図り、外部からの移住者も受け入れていくことを知っているのではないかと思います。彼らは住民同士のよい関係を築くためにと絆と礼儀と和平を保つことを自然に身につけているのでしょう。

鎌倉の地域の伝統は長い歴史の中で幾世代にもわたって受け継がれています。そして今日ではこの文化的・歴史的な財産を守ろうとする意識はさらに高まっているようにみえます。行政や保護団体そして住人の努力あってのことです。例えば、息子が通う学校では、『まち探検』という授業があって、教室で授業をする代わりに外に出て史跡を巡りながらその場で学習しています。鎌倉の子どもたちはこうして自然に歴史の宝庫がすぐそばにあることを学んでいるのです。

他にもう一点私が驚いたことに、私と同世代の方々との知りあうなかで、夫婦・子どもと共に両親の近くで生涯を鎌倉から出ずに過ごしている方がたくさんいるのです。親子共に同じ小学校に通っているという人の多さは他では珍しいのではないかと思います。東京方面への通勤に便利ということもあるかもしれませんが。しかしおおきな理由はやはり、鎌倉はあまりに居心地良く住民が愛する町であるだけに外に出ていく必要がないのではないかと思います。

鎌倉の子どもたちはこのように自然に親から生まれ育った町を愛し守っていく心を引き継いでいるのです。自然の中で遊びながら彼らを静かに見守る寺社の脇を走り抜け、親が隣人たちとお祭りの準備をしているのを眺め、通学途中でも迷った旅行者を道案内したり…。子どもたちは自分たちが鎌倉の住人であることをきちんと認識し、将来この町を守っていく責任を誇りに感じているのだと思います。

もしある町が世界遺産になるだけの価値を有していたら、その町の住人はその価値をよく知り、そしてその町を未来まで保存していかなければなりません。鎌倉はまさに多くの貴重な遺産と、そのうえ素晴らしい自然を有する町です。鎌倉の住人は当然この価値を知っており、この宝の町を大切に守っていくことでしょう。そして今日の子子どもたちが大人になったときに、きちんとこの宝物を託すことができるでしょう。

もしこの町が世界遺産になったとしたら、鎌倉の人々は世界遺産の住人にふさわしいといえます。私が思うに、彼らが鎌倉の町をより素敵にし、そして彼ら自身が鎌倉の《魅力》のひとつなのです。